

# 乗杉嘉壽東京音楽学校長の青年期における社会教育的教育観の形成

## — 石川県尋常中学校および第四高等学校時代の調査による —

橋 本 久美子

### はじめに

本稿は、乗杉嘉壽東京音楽学校長（明治11年〔1878〕11月19日-昭和22年〔1947〕2月1日、昭和3年4月～20年10月在任）が金沢で過ごした中学校と高等学校時代に光を当て、その時代背景、校風、学生生活を明らかにすることで、彼の教育観の形成に与えた影響を考察し、東京音楽学校長時代の社会教育を重視した学校運営の原点の解明を目的とする。

乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校は、定期演奏会の回数を増やし、総練習を公開し、ラジオ放送し、合唱授業の公開日を設けて修学旅行生に見学させ、創立記念日の運動会を始め、御前演奏に力を注ぎ、同窓会組織を強化し、早期教育機関を作り、受験生から社会人まで受け入れる選科を拡充し、現場教師の夏期講習を行うなど、学校を社会に開き、時代や社会の要求を見越した運営を行った。学校は社会教育の一拠点となり、音楽文化の発信拠点ともなった。時局に対応し国策に即応した学校運営は戦後的平和主義の観点から批判もされたが、その多彩で懐深い発想がいかにして生まれたのかについては一考に値しよう。

乗杉は文部省督学官時代の大正6年（1917）欧米の教育事情を視察し、日本では学校教育偏重で社会教育が遅れているとの認識で社会教育行政に尽力し、大正13年初代社会教育課長となった<sup>1</sup>。乗杉は社会教育史研究において「草創期の社会教育行政を担った」人物かつ「現代社会教育の原型」<sup>2</sup>、すなわち「近代日本社会教育の最重要人物の一人」<sup>3</sup>と位置づけられる。そこでは乗杉の文部省時代の社会教育行政が研究対象とされ、彼の社会教育の思想形成に欧米視察が大きく関わっていることなど明らかにされた<sup>4</sup>。しかし、彼の社会教育は、彼が文部省を去った後、17年半にわたり社会教育を実践した東京音楽学長時代なくては語れないであろう。『東京芸術大学百年史東京音楽学校篇第二卷』<sup>5</sup>に同校時代の乗杉が紹介され、近年は教育行政の研究でも乗杉の東京音楽学校時代が注視される<sup>6</sup>。なお残された問題は、乗杉の社会教育的教育観の原点と形成についての解明であろう。

本稿に先立ち、筆者は乗杉の東京音楽学校長時代を“社会教育論の実践と建学の精神の具現化”の観点よりたどり<sup>7</sup>、その延長で乗杉の生家、富山県砺波市となみしの浄土真宗寺、眞壽寺しんじゅじを訪ね、彼の発想の原点が眞壽寺の日常にあったのではないかと認識を新たにした。また乗杉が青春時代を過ごした石川県尋常中学校（現・県立泉丘高等学校）と第四高等学校（現・金沢

大学)の在学中の記録には、彼の教育観の形成につながると見られる点が見出された。本稿は彼の教育観の原点と形成を論ずるため、眞壽寺と小学校時代についても言及する。

## 1. 社会教育の原風景としての生家と幼少期

### 1-1. 江戸時代からの社会教育の拠点：生家・眞壽寺

乗杉嘉壽は富山県東礪波郡出町の眞宗大谷派眞壽寺(浄土眞宗徳水山眞壽寺)の次男として生まれた。眞宗王国富山の実態は、安カ川恵子礪波郷土資料館学芸員の調査結果に示されている<sup>8</sup>。浄土眞宗寺は全国平均では全仏教寺院の3割以下だが、富山県では7割超、礪波地域では8割超である。また富山県内の浄土眞宗寺では浄土眞宗本願寺派(お西)と眞宗大谷派(お東)が約半々だが、礪波ではお東が圧倒的に多い。眞壽寺もお東である。

徳川家光の時代の慶安2年(1649)に杉木村の二郎兵衛を筆頭に、周辺の村々の16名の連署による「町立願書」が奉行を通じて藩に提出され認められた。これが杉木新町の発祥で、町立とともに町の中心地に常設説教所として創建されたのが眞壽寺である。同寺では一年365日、一日も休むことなく午前と午後、巡回する説教者によって説教が行われた。安カ川によれば、説教者は石川県から来る人が富山県人の2倍で、各寺を10日間ほどずつ滞在して説教して回ったという。かつて礪波周辺には常設説教所が高岡、戸出、出町、井波、城端、福光、福野、津沢、石動の各町にあり、福光には3寺あり計11寺あった。城端のみ現在も毎日説教が行われている。出町(＝杉木新町)の説教所が眞壽寺で、説教を聞くことは門徒の生活の一部であった。説教者の巡回予定表を見て、お気に入りの説教者を追いかける門徒もいた。人気のある説教者が眞壽寺に来ると、地元民はもとより遠来の門徒も押し寄せ、人の波は徒歩5分ほどの出町駅まで続いたという。昭和50年頃の眞壽寺の写真では、説教を聞く人々が堂内を埋めつくしている。昭和55年から60年までに眞壽寺を訪れた説教者が延べ230人という記録は、眞宗王国を支えた説教の重要性を裏付ける。説教帰りの人々で商店街が賑わい、寺は地域経済の活性化にも一役買った。寺は心の拠であり、教養と娯楽の場であり、町の精神的支柱でもあった。眞壽寺は創建当初からいわば社会教育の場だったのである。昭和54年3月、礪波市都市開発事業に伴い、眞壽寺は本町から永福町へ移築された<sup>9</sup>。眞壽寺跡の一部は児童館となり、道路も拡張されたが、その跡地にかつての賑わいを感じ取ることは難しい。むしろ移転前の住宅地図に記される眞壽寺と商店街が当時の熱気を想像させる。現在の眞壽寺は閑静な一角にあり、住職は今も毎朝、月命日の家庭を回る。寺は今なお地域のシンボルとして精神文化を支えている。

嘉壽少年は物心つく前から父の上げる経や説教者の名調子を誦んじたことだろう。説教者たちは浪曲師のように声を鍛え、人心を魅了した。説教者たちの話に涙し、笑う人々、説教の抑揚や節回しなど、眞壽寺の日常は嘉壽少年の原風景となったはずである。

## 1-2. 初等教育草創期の<sup>せつぶん</sup>節文小学校

明治6年(1873)4月、杉木新町に杉木小学校が開校し、翌7年9月郡奉行官舎に移転して節文小学校と改称した。現在の砺波市立出町小学校である。乗杉の在籍記録は未確認だが、中学校進学には小学校卒業が前提ゆえ、節文小学校を母校と暫定し、初等教育草創期の同校にふれる。明治7年現在の節文小学校の児童数は旧砺波市内で最多の221名であった<sup>10</sup>。明治12年9月、教育令発布により学期を8カ年とし、翌13年12月、教育令改正により初等3年、中等3年、高等2年とした。明治15年当時の児童数は352名となった。嘉壽少年の在学中と考えられる20年4月に杉木新小学校(簡易科)を併設し、9月には児童数増加と校舎老朽化のため新築落成した。23年尋常科・高等科を定め、24年1月30日、教育勅語謄本下賜、杉木新小学校(簡易科)廃止、25年出町外11カ村組合立出町高等小学校発足、節文尋常小学校と改称、26年2月には明治天皇御真影が下賜された。

出町小学校の校長室に、昭和14年(1939)制定の校歌の大型パネルが飾られている。「1. 砺波の平野土肥えて 流れも清き雄神川 つきせぬ幸に恵まれて <sup>ゆかり</sup>由緒も深き学舎よ 学べばうれしあゝ我等 つとめはげまんあゝ我等 2. 東の天に照り映えて 雄々しき姿立山の <sup>いや</sup>弥高きにもたとふべく 誉れはしるき学舎よ 学べばうれしあゝ我等 つとめはげまんあゝ我等」。「しるき」は“著し”、“際立つ”の意か。東京音楽学校長当時の乗杉嘉壽作詞、作曲は同僚の岡野貞一(明治11年[1878]2月16日～昭和16年[1941]12月29日)である<sup>11</sup>。

## 2. 社会の一員としての自覚と危機意識：石川県尋常中学校時代

### 2-1. 砺波から金沢へ

富山県内には明治18年に富山城の外堀、現在の富山市<sup>そうがわ</sup>総曲輪に現富山県立富山高等学校の前身である富山中学校が唯一開校していた。加賀藩支藩の富山藩にあった。しかし乗杉は、隣県だが砺波と同じく旧加賀藩の金沢に進学した。現在はJR城端<sup>じょうはな</sup>線の砺波駅から高岡駅で北陸本線に乗り換えて金沢駅まで53.9km、1時間半ほどだが、中越鉄道の開業は明治30年であり、出町(現砺波)金沢間が開通するのは明治31年1月である。青年は砺波を早朝出発し<sup>ようぜん</sup>医王山を越え、日暮れまでに金沢に着いたのであろう。

### 2-2. 真宗大谷派立から県立となった石川県尋常中学校

金沢では明治14年(1881)に石川専門学校予備科が創設され、17年予備科を廃し附属初等中学科を置き、21年3月同校同科を廃し、10月石川県と大谷派共立の尋常中学校が開設された。25年真宗大谷派立尋常中学校となるが26年5月閉鎖され、7月県令38号を以て同校の生徒と校舎を引き継いで石川県尋常中学校が開校した。ここに乗杉は入学する。同校の由来をもう少し記す<sup>12</sup>。明治初頭、真宗大谷派は廃仏毀釈に対抗し、全国的に学校・幼稚園・少年団・

青年会・官立高校仏教研究会、職場の聞法会を組織し、受刑者の精神的救済にあたる教戒師を育成した。西福寺も幼稚園、学校、仏教研究会、健児団（ボーイスカウト）を設立し、大谷尋常中学校もそうした一環で開校したが、急発展のため廃仏派からも宗派内からも反感を買い、住職を継いだばかりの32歳の第18代三輪谷厳章は暴漢に襲われ、9歳の現隨を遺して死去した。西福寺では新伽藍建設中だったが、台風により本堂が倒壊し、再建のため境内地を売却した中に中学校があり、県がこれを引き取ったという経緯がある。「金沢一中・泉丘高等学校発祥の地」の記念碑が西福寺境内に建立されている<sup>13</sup>。

同校は明治30年（1897）に元藩老本田家跡の中屋敷跡（現・本多町3丁目）の新校舎に移転する。40年に石川県立金沢第一中学校（通称金沢一中）と改称、昭和12年（1937）現在地の富樫町（現・泉野出町）に移転、23年3月に卒業生を送り出し、55年の歴史を閉じて金沢第一高等学校となり、翌24年4月より男女共学の新制石川県立泉丘高等学校となった。昭和30年に金沢一中と県立泉丘高校の二つの同窓会が合併して一泉同窓会が誕生した。

### 2-3. 石川県尋常中学校の入退学・卒業の事情

一泉校史資料室が所蔵する文書綴『明治二十六年七月以降 明治四十一年三月終迄 入学生一覧 甲号一 石川県第一尋常中学校』<sup>14</sup>の生徒名簿では、乗杉等が入学する以前の生徒氏名が並び、「以上式百六十三名ハ旧大谷尋常中学校ニ在学シタル生徒ニシテ二十六年七月訓令第三百二十五号ニ依り同年七月六日入学ヲ許可シ各級ヘ編入シタルモノトス」とある。前身校からの263名の内訳は、1年154名、2年79名、3年19名、4年8名、5年3名である。次いで明治26年9月入学者29名が記され、乗杉嘉壽の名前がある。「右頭書ノ各級ヘ入学許諾ス 明治二十六年九月 石川県尋常中学校」。29名のうち乗杉と同じ「第一年級」は13名、「第二年級」から「第五年級」が16名である。石川県出身者が21名、富山県2名、東京府、愛知県、鳥取県、香川県、福岡県、佐賀県各1名である。族籍は士族17名、平民12名だが、金沢市に限ると士族10名、平民2名である。29名中24名の名前に「退学」の朱印がある。「卒業」印のあるのは乗杉等3名で<sup>15</sup>、2名には印そのものが確認できない。中途退学者の異常に多い理由について『金沢一中・泉丘高校百年史』は「発足当初は貧乏士族の師弟が多かった」「僅かに四分の一弱しか卒業できなかった」<sup>16</sup>と記す。退学理由の大半が「家庭の事情」と「実業に従事」である。同書によれば当時の金沢では授業料月額10銭の義務制尋常小学校の就学率が7割、月額25銭の高等科に進む者がその2割強、月額50銭の中学校を目指す者は尋常小学校卒業者の1割前後であった。地主や富裕層は必ずしも進学を必要とせず、学生の6割強が進学して生活手段を求める没落士族であった。つまり生活手段を得るために進学しながら、経済的理由で諦める学生が四分の三いたのである。

## 2-4. 社会への責任感の芽生え

当初はまだ服制の規制もなく、中学生たちは「木綿の筒袖の和服に短い道場袴をはき、雨の日は菅笠か番傘、雪の日は蓑帽子をかぶり、厳冬にも足袋をはかず、素足に朴齒の下駄で闊歩し、運動場を裸足でかけ廻っていた」<sup>17</sup>。石川県尋常中学校では、剣道は正科に準じ、柔道も課外活動で行われた。生徒たちは町道場で稽古に精を出し、通っている道場が一見してわかる蜻蛉や髑髏の印の付いた道場袴のまま通学し、校内を闊歩したという<sup>18</sup>。蜻蛉はまっすぐに飛んで決して下がらない、髑髏は決死の覚悟の象徴である。近代的な制度の教育が、道場や藩学の空気が色濃く残る校内で行われていたのである。一泉同窓会には明治28年卒業記念および31年寄宿生の写真があり、当時の中学生の気風を伝えている。校長と数名の教師は詰め襟や背広姿、卒業生、寄宿生たちは袴姿で収まっている。寄宿生たちのなかには正面を向いている者もあれば、ある者は斜に構え、ある者は右方を、ある者は左方を見ている。同校百年史は、乗杉の一級下で特待生を3年間続け、卒業直後に病死した中川久太郎の遺稿を紹介し、中学生の気概について「退嬰的な県民性を打破し藩閥勢力に対抗して雄飛しようという野心」「列強の極東侵略によってもたらされた危機意識に基づく素朴な愛国心」「国威の発揚に力を尽くさねばならないという溢れる責任感」「自己の位置を国家・社会に対する責務と直結させて考え、天下国家の動向を論ずる」<sup>19</sup>等を指摘する。ここに指摘された事々は、東京音楽学校長時代の乗杉が生徒に与えた訓示と重なる。乗杉は生徒に国家や社会の情勢を伝え、己の果たすよう自覚を促す。中川と同様の野心、愛国心、責任感は乗杉にも培われ、乗杉はそれをまた生徒に伝えようとしたのではないか。

『金沢一中・泉丘高校百年史』に記載される最初の教育課程表は明治43年（1910）のものである。1年から5年までの週合計時間数で修身5、国語及漢文33、英語35、歴史・地理16、数学21、博物（鉱物、植物、生物、衛生、動物）10、物理4、化学3、図画7、体操15とある。唱歌が義務教育の尋常小学校で必修となるのは明治40年の小学校令からであり<sup>20</sup>、東京音楽学校編纂『中等唱歌』が中学校向けに刊行されるのは明治42年である。宝生流能楽の盛んな金沢で乗杉が尺八や能楽にふれたか、オルガンを聞いたか等は定かではない。

## 2-5. 壮士風の富田校長と元内務官僚の野田校長

乗杉入学時の富田輝象初代校長（明治26年〔1893〕9月～30年11月在任）について、一泉同窓会機関誌『一泉』は「眼光炯々とした壮士の風貌の持ち主」<sup>21</sup>と記す。富田校長は安政元年〔1854〕加賀藩士の家に生まれ藩学明倫堂に学び、校長としては「私塾的な形式に終始して、魂のふれあいの場を求める様に努力され」、生活は「常に野人的な壮士振りを発揮し、酒を好み、自作の詩を吟じて楽しむ風情があった」と。前田利家公桶狭間の合戦の武功を五言絶句に詠むなど、加賀藩前田家が心身の隅々にまで浸透していたのであろうか。

同窓会誌は第二代野田藤馬校長（明治30年11月～32年6月在任）を富田校長と対比的に伝



え、「二代目野田藤馬校長は野人的な富田校長とは対照的に当時、最高の官僚養成機関とも云うべき帝国大学に学んだという学歴の相違や、一方が民権運動から地方官僚に転じたのに対し中央の内務官僚として過して来た経歴の違い」<sup>22</sup>等をあげている。愛媛県に生まれ、帝国大学法科大学<sup>23</sup>出身で元内務官僚の校長はわずか2年間の在任中に校訓、校旗を制定し、藩学的、私塾的な趣から近代的な教育制度に即応した学校に変革した。校訓七箇条は「第一条 忠孝ノ大道ヲ明カニシ尊皇愛国ノ志気ヲ養ふへし」<sup>24</sup>に始まり、続いて校規を遵守、師長を敬重、学友を信愛、精神の鍛錬、言行一致、質素勤勉、辛苦に耐える等とあり、忠君愛国と質実剛健を旨とする方針を示した。校訓は旧制中学校の精神的支柱であり続けた。

## 2-6. 校友会の設立に尽力し、「人類としての吾人の価値」を弁ず

乗杉嘉壽は富田校長の私塾的な校風に育ち、卒業前の数ヶ月を野田校長の新風に学ぶ。卒業間際の明治31年（1898）2月28日に校友会が発足し、その発起者として乗杉が奔走したことが校友会誌創刊号に記されている。発会式の挨拶で野田会頭は「五年生某々子等余の室に來りて、五年生発起となり會員を募り雑誌を発刊し度に付き許可し呉れとのことを以てす」<sup>25</sup>とある。某々子の一名は乗杉であろう。中川久太郎幹事の寄稿文より乗杉に関係するところを抽出すると、校友会の話は明治29年3月から4月にかけて乗杉の一年先輩の3名<sup>26</sup>が富田校長等に提言し賛同を得、翌30年10月26日に5年生が兼六園覽勝亭に会合し、「乗杉嘉壽氏等校友会組織の事を発議し満場一致を以てこれを賛し」<sup>27</sup>創立委員に「乗杉嘉壽、津田克太郎、廣根市郎平、片山信太郎、村上直彦、畑鉄藏の六氏選定」<sup>28</sup>した。しかし富田校長は経緯不詳だが更迭となり、新任の野田校長に許諾を得て、職員から3名、発起者より3名の委員を選んだ。発起者委員の一人が乗杉であり、編集部幹事に乗杉、津田、村上（補助）が選定された。中川は記す。発会式の終わりに「本会創立に最も<sup>じんすい</sup>尽瘁せられたる乗杉嘉壽、田鶴濱又三郎、両君の演説あり、孰れも快弁滔々聴衆の感を惹起」<sup>29</sup>とある。乗杉の快弁滔々には、説教者の説法・話法が巧まずして生かされていたであろうか。

卒業直後の明治31（1898）年4月26日、校友会講談部第一回通常会の7演説があった。乗杉は前知事や教員に混じり「人類としての吾人の価値」と題し、宇宙間生物を論じ、社会の道德墮落を嘆き「さすがは我校知名の能弁家、大に聴衆の感動を牽けり」<sup>30</sup>と評された。宇宙内存在である人間は如何に生きるべきかとの根源的な問題から社会の穢れを糾弾し、自己の存在価値をも問う。宗教心と正義感の強い、正論一本の青年像が浮かび上がる。

## 2-7. 斎戒沐浴し戎装で臨む御宸影拝戴式

石川県尋常中学校は明治30年（1897）10月に本多町に校舎竣成した。31年1月に新校舎に移り、乗杉の学年は卒業前の3ヶ月を新校舎で過ごした。卒業前日の31年4月22日には御宸影の奉安所が講堂正面に設けられ、拝戴式が行われた。県庁で御宸影を頂いて帰校し、奉安

所に収める儀式である。この「わが校千載一遇の重典」についても中川が記述している<sup>31</sup>。前日斎戒沐浴し翌朝学校で隊伍の編成を終え、職員卒業生が先導し戎装(＝軍装)した5年生と4年生がこれに続いて石川県庁に向く。校長が御宸影をいただき、生徒は頭を垂れ呼吸をひそめて歩き、御宸影の前を過ぎる時は捧げ銃の礼と最敬礼を行う。帰りは戎装した者たちが御真影を護衛し先身をなし、御宸影を奉安所に安置し奉ると、生徒は武装を解き徐に式場に入り、最敬礼する。5年生の乗杉も戎装で臨んだのであろう。乗杉の青春期は、明治の儀式が刻々と定着し恒例化していく時期でもあった。

## 2-8. 卒業生総代「怒濤狂瀾何かあらん」

乗杉の中学校卒業は明治31年4月23日で、校舎新築落成式と「第五回卒業証書授与式」が行われた。校長は教育勅語を奉読し卒業生33名と修了生、特待生に証書授与した。新潟県知事は「明治廿七八年の役」は東洋の地図を一変したが、列国は日進月歩を遂げており「益々奮ひ愈々励んで吾が国家が諸氏に望む所以に負くこと勿れ」「諸氏が将来は東方の光なり勉旃<sup>せん</sup>」<sup>32</sup>と激励し、校長は、やっと内海で試運転ができるようになったが「小成に安んずるか如きこと勿れ」、大海の航海術は知らないのだから、今後は既習の術を未習の所に試みよと述べ、「自負心即ち世俗に所謂生意気と云ふ事に染む勿れ、今より高等学校に入らんとする者は殊に此処に注意せざるへからず」<sup>33</sup>と四高に進む者に謙虚さを求めた。

卒業生総代は乗杉嘉壽であった。答辞は盛典と来賓への感謝に始まり、「知事閣下の懇諭」と「校長閣下の訓戒」に感謝し、「風吹きすさふ荒野もあらん濤起ち狂ふ大海もあらん」「生等幸いにして此の神国に生れ出て此の聖世に逢へり何そ目前の愉を望みて小成に安んじ別離の苦を説きて児女に倣はん正しきを踏みて恐る、こと勿れとは哲人の言」「怒濤狂瀾何かあらん雪風瘴烟何かあらん」「只当に諸先生の教訓を羅針となし同窓諸君の忠言を燈光となし各其志す所に進むべきのみ斯くして庶幾くは厚き恩誼の万一に報ゆる日あらんか聊か蕪辞を陳して茲に奉答す」<sup>34</sup>と終える。模範例のような答辞で、乗杉は19歳になっていた。当時の中学生は格調高い言葉や文体がすらすら出るほど和漢の典籍を誦読したのだろう。乗杉の答辞は、のちに東京音楽学校長時代の式辞や訓示に頻出する語句の片鱗を見せて興味深い。

乗杉は石川県尋常中学校最初の入学生だが、同校では26年度末に卒業した前身校からの5年生を1回生とし、乗杉等を5回生と数える。明治31年の校友会雑誌に第1回からの卒業生名簿があり、進路も記されている。第1回卒業生は3名、第2回は7名、第3回は4名、第4回は24名、乗杉の第5回が33名である。同期生の15名が第四高等学校に進学し、工業学校・商船学校・物理学校等に7名進学、就職組3名である。乗杉は校友会の創立委員を務めた津田克太郎と片山信太郎とともに第四高等学校の「第一部文科」に進んだ。

校友会誌第2号の論説欄に「賛助会員 乗杉柳蛙」の「孔夫子」なる寄稿がある<sup>35</sup>。第4号では、校友会に尽くした第5回卒業生2名と、第6回卒業生3名に「有功賞贈与」されたこ

とが記され、その一人が乗杉である<sup>36</sup>。端艇部への寄附 1 円50銭の記録もある<sup>37</sup>。

### 3. 軍都に学ぶ意気軒昂な旧制高校生：第四高等学校時代<sup>だいし</sup>

#### 3-1. 四高界限<sup>しこう</sup>

乗杉が学んだ第四高等学校は<sup>おおつきでんどう</sup>大槻伝蔵の屋敷跡地の仙石町、現在の広坂 2 丁目にある。至近にある歓楽街香林坊は、学生向けのカフェ、映画館も開業し北陸随一の繁華街となった。校舎の設計は学校建築を多く手がけた山口半六と久留正道<sup>38</sup>で、明治24年 7 月に竣工した。創設費用約12万円のうち前田家が約 8 万円、残りを地元有志の負担で開校した<sup>39</sup>。校舎と校庭は「石川四高記念文化交流館」として現地保存されている。

#### 3-2. 北條時敬校長<sup>ときゆき</sup>

乗杉在学中の校長は数学者で高等教育の大御所と称される北條時敬である。安政 5 年 (1858) 金沢藩士の次男として生まれ、明治18年に東京帝国大学理学部数学科を卒業し、明治31年 2 月から35年 4 月まで四高校長を務めた。北條校長は綱紀肅正に努める一方で、学生の自主的な学生生活を支援し部活動も奨励した。自宅に教官を招いて懇話会を開き、招魂祭で浮き立ち授業に欠席した法科 1 年一同を10日間の停学処分にし、級長会で生徒の成績や怠惰を報告し、ボートレース大会の準備にあてた休日を廃止し、遊蕩生には放校 3 名、論旨退校 4 名の処分を下した。

#### 3-3. 全国からの入学生

##### 3-3-1. 文科 1 年生の出身府県と年齢

明治31年 9 月、乗杉は第四高等学校に入学する。帽章制服と白線四条に金色四稜星の校章は 2 年前に制定されていた。『第四高等学校一覧 自明治三十一年 至明治三十二年』の「第一部第一年文科」36名中に乗杉の名がある<sup>40</sup>。出身は、石川県 6 名、富山県 4 名、ほか北は青森から南は鹿児島まで17府県にわたる。北陸三県の出身者には、得悟、憲珠、定視、静吾、良法、覚成など寺の子息かと思わせる名前が目立つ。千葉県出身の木内喜右衛門の名前がある。彼は乗杉と同様、後に東京帝国大学で哲学を専攻し、東京音楽学校でも同僚となる。平均年齢は満20歳 8 ヶ月、最高が25年 4 ヶ月、最低が17年 7 ヶ月で、乗杉の19歳10ヶ月は平均より若い。

##### 3-3-2. 学科と教師

文科の学生が 3 年間に学ぶ学科は、選択科目も含めると、倫理、国語及漢文、英語、独語、仏語、歴史、地理、数学、物理、動物及植物、論理、経済通論、法学通論、兵式体操である。



31年度の職員名簿では、国語には国学者で歌人の高橋富兄<sup>とみえ</sup>、近世文学研究者で俳人の藤井乙男<sup>おと お</sup>、「雪」「案山子」の作詞者でのちに東京音楽学校にも関わる武笠三<sup>むか きさん</sup>、倫理・漢文には近代小学校教育の父・村上珍休、独語にはドイツに留学しのちに住友本社理事となる草鹿丁卯<sup>くさか ちよう</sup>次郎<sup>じろう</sup>、独語・ラテン語にはドイツ語教育に40年を捧げたユンケル（独Emil Junker）、英語には日本に本格的なサッカーを教えたデ・ハビランド<sup>41</sup>（英W.A.de Havilland）、兵式体操に福見常太郎、日下庄太郎、陸軍歩兵中尉磯田正謙の名が見える。

### 3-3-3. 規則：「立身報国ノ基ヲ建ツヘキ事」

学生心得細則に曰く「職員ニ対シテハ勿論相互ニ敬礼ヲ行フヘシ」「教室内ハ勿論控所廊下タリトモ吐唾及煙草ノ吸殻ヲ棄ツル等総テ汚穢<sup>おおい</sup>ノ所為又ハ危険ノ虞<sup>おそれ</sup>アル事ヲ為スヘカラス」<sup>42</sup>。敬礼する学生、校舎に立ち籠める煙草の煙、吐唾と吸い殻…も四高の一面であろう。

通則「第五節学生心得」に曰く「第一項 智徳ヲ淬礪<sup>さいれい</sup>シ身体ヲ健全ニシ立身報国ノ基ヲ建ツヘキ事」（自己の修養と身体健全に努め、身を立て国恩に報いる基礎を作ること）、「第二項 校則ヲ遵守シ師長ヲ敬重シ学友ヲ信愛スヘキ事」「第三項 廉耻ヲ励ミ志操ヲ固クシ苟モ浮薄ノ行為アルヘカラサル事」（恥を知り志を固くして仮初めにも軽々しい行動をとらぬこと）「第四項 礼讓ヲ重シ威儀ヲ正クシ苟モ傲慢ノ挙動アルヘカラサル事」「第五項 協和輯睦ヲ旨トシ純良ナル校風ヲ発揚スヘキ事」<sup>43</sup> よく学び国のお役に立つようと、人間形成と教養教育を掲げる学生心得だが、石川県尋常中学校の校訓もこれと共通点が多い。

学生寮「時習寮」の細則「食堂内心得」第一条にある「猷立以外ノ品量ハ猥<sup>へん</sup>リニ之ヲ要求スルコトヲ得ス<sup>44</sup>」は、食事に群がる食べ盛りの集団を彷彿とさせて余りある<sup>45</sup>。

### 3-3-4. 青年節酒会

乗杉が入学して間もない明治31年（1898）9月、「第四高等学校青年節酒会」が発会した。飲酒に随伴する凡百の弊害を防止し校風の振起、国家の元気を作興することを目的に、「飲まぬ人は入会せざるべし、飲む者は入会すべからず、よく節する人は入会すべし」<sup>46</sup>と粋な入会条件を掲げ、会員は酒宴に臨んでも過飲せず人にも強要すべからず等の会則を設けた。翌年の『北辰会雑誌』に青年節酒会会員の職員、在校生、卒業生424名の名前が掲載されている。そこに乗杉の名は、飲むからか、飲まぬからか、見あたらない<sup>47</sup>。

### 3-3-5. 時局

乗杉入学の頃、日清戦争後の勢いで石川や金沢にも鉄道が開業した。金沢城址には明治8年より名古屋鎮台の陸軍歩兵第七連隊が置かれていたが、31年10月1日、金沢第九師団司令部が置かれた。騎兵第九連隊、野戦砲兵第九連隊、工兵第九大隊、輜重<sup>しちようへい</sup>兵第九大隊の半数以上が石川県人で<sup>48</sup>、将兵と家族2万人が住む金沢は名実ともに軍都となった。加賀百万石の変

貌を高校生も敏感に感じ取ったことであろう。

### 3-3-6. 学年成績 1 番

明治期の学年成績が金沢大学資料館に保存されている<sup>49</sup>。学科ごとに三学期の各評点、学年試業点、学年評点があり、諸課目学年平均総数、平均点、席次、及落の項目で一覧表になっている。乗杉の席次欄に「1」とある。学年成績 1 番である。とくに独講読と独文法作文で二位以下を引き離し、文科一年ではただ一人数学を選択し、地理を外している。

### 3-4. 2 年生：36名から22名が 進級

#### 3-4-1. 学業

明治32年9月現在の2年生の名簿では、前年度学年成績を反映し筆頭に乗杉の名がある。入学時の36名は1年後には22名に減り、1年生の名簿になかった留年組4名が加わり、2年生26名となった。留年組の一人が尋常中学校時代の先輩、西川巖<sup>50</sup>である。

2年生の学年成績は西川が1番、乗杉が2番である。独文法作文のところに「中目」とある。独語と仏語を担当した中目覺教授か。仙台藩士で東京帝国大学独逸文学科を卒業し、言語学、古代文字解読、地理学、地誌学など多方面に足跡を残した。体操では乗杉が学年1番の97点で西川に10点差をつけたが、西川の体操も低いほうではない。32年には哲学に西田幾多郎教授<sup>51</sup>が加わり、学友会雑誌に論説「美の説明」の寄稿がある<sup>52</sup>。英語講師には大正時代に東京音楽学校校長を務める茨木清二郎の名もある。

学科	国語	漢文	作文	英講読	英文法作文	独講読	独文法作文
乗杉	88	70	72	77	85	80	1
渡辺良法	41	40	70	72	77	85	1
片山信郎	42	70	72	77	85	80	1
須藤三郎	42	70	72	77	85	80	1
松本豊哉	42	70	72	77	85	80	1
石塚雄策	42	70	72	77	85	80	1
尾花誠	42	70	72	77	85	80	1
堀江嘉吉	42	70	72	77	85	80	1
松崎豊一	42	70	72	77	85	80	1
飯田秀男	42	70	72	77	85	80	1
藤井茂雄	42	70	72	77	85	80	1
白谷裕松	42	70	72	77	85	80	1
志澤建蔵	42	70	72	77	85	80	1
奥山隆夫	42	70	72	77	85	80	1
大川敏彦	42	70	72	77	85	80	1
原義朝	42	70	72	77	85	80	1
山口治民	42	70	72	77	85	80	1
柳澤誠典	42	70	72	77	85	80	1

Fig.1 1年生学年成績(国語、漢文、作文、英講読、英文法作文、独講読)『自明治31年9月至明治32年7月大学予科学年評点』(金沢大学資料館所蔵)

学科	独文法作文	歴史	地理	数学	体操
乗杉	97	70	72	77	85
渡辺良法	40	65	70	75	80
片山信郎	50	50	60	55	60
須藤三郎	60	55	65	60	65
松本豊哉	70	60	70	65	70
石塚雄策	80	70	75	70	75
尾花誠	90	80	85	80	85
堀江嘉吉	100	90	95	90	95
松崎豊一	110	100	105	100	105
飯田秀男	120	110	115	110	115
藤井茂雄	130	120	125	120	125
白谷裕松	140	130	135	130	135
志澤建蔵	150	140	145	140	145
奥山隆夫	160	150	155	150	155
大川敏彦	170	160	165	160	165
原義朝	180	170	175	170	175
山口治民	190	180	185	180	185
柳澤誠典	200	190	195	190	195

Fig.2 1年生の学年成績(独文法作文、歴史、地理、数学、体操)。席次の右側に「及」「落」「休」が記されている。(資料名および所蔵館同上)

### 3-4-2. 乗杉の講演「人生の墮落」

2年生になって間もない明治32年（1899）10月14日、生徒控所にて演説討論部の演説会が開かれた<sup>53</sup>。教員1名、来賓1名と学生2名が演説した。戸田海市教授（経済通論、地理、英語担当）の弁舌を修練奨励する開会の辞で始まる。以下、記事を抄出する。乗杉は「人生の墮落」と題し、開口一番「我亦社会墮落の一標本なり」と大声咤呼し、「天下同情なく博愛なく」「義士隠れて正義光を放たず、欺偽窃盗殺人等あらゆる罪惡は年々其数を増し」「士風は衰退したる、道義の潰乱したる、今日より甚だしきはなし」と世を駁し、「如 此 人生の墮落するに至りしは、全く国民の脳裏に、未来の觀念…宗教の觀念欠乏せしに起因す」。話は一転し、宇宙は無極であり、人の性靈も太極であり無極である、古来宗教界における偉人の行動を引証し、未来の觀念を持って永遠の希望に燃ゆる人の高潔と偉大さを説き、宗教心を起こす時が、墮落より救い出される時である、国民一般が宗教心を起こし混沌たる濁世を救うべきであると「訓戒策励、意気軒昂」。説くこと半ばにして天の一方を睨み、二三分黙る場面あり、論旨不明瞭な所もあり一段の鍊磨を望むが、場内は熱血で活気に溢れたと記される。

宗教観と哲学的世界観の裏付けを以て人間のあり方について力任せに声を張り上げる乗杉の様子が想像される。青年期の彼は、人は如何に生きるべきか問い続けていたのであろう。この世を悪から救うために自分は何をすべきかとの哲学的倫理的な足掻きから易经も学び、天地宇宙の真理を探究したのではないだろうか。西田哲学<sup>54</sup>との出会いも、乗杉を東京帝国大学の哲学に進ませた理由の一つに考えられる。東京音楽学校長時代の乗杉の訓示式辞では宗教的な教訓もほとんどなく、話の辻褄が合わないこともない。だが高校生の頃は、宗教心と正義感と葛藤を捲し立てるうちに論旨が行方不明になることもあったようだ。

### 3-4-3. 秋季陸上運動会：一哩<sup>マイル</sup>競争で入賞

乗杉は「秋季陸上運動会状況」でも姿を現す。天長節（11月3日）午前7時の勅語奉答、御真影拝賀、校長演説に始まり、8時運動会が開始した。人気の行事らしく『北辰会雑誌』は準備から閉会まで27頁を費やしている。寮生の企画による「古物展覧会」もあり、四高生の知性と諧謔を開陳する展示品は5頁に及ぶ。「古靴—明治六年西郷従道君台湾征伐の歳穿きし者」「アダムとイブかはきし高き此靴」「西郷南洲翁の靴下」「足柄山の笙の笛」「アメリカ革命戦争の際ワシントンの被りし帽」「舌切り雀の老婆か糊を作りし時用ゐしふるひ」「徳川時代の陣笠—上野の戦争の際用ゐしもの」「風呂敷—天地をひとつに包み投げすてん「憂」と「悩」の源にしあれば」「土塊少々—地球の一部」「麦藁帽子（フチ狭シ）ローマ時代に於る帝王の冠」「古き鏡の蓋一枚—小埜小町の姿見鏡」「常盤御前の用ゐし笠」「グラス二片—コロンプス米国発見当時の土産」等々。競技種目は二丁<sup>ママ</sup>競争、四丁競争、六丁競争、一分間競争、一脚競争、二人三脚、載囊競争、武装競争、委員余興競争（勝者は長脚王のユンケルとハビランド）、提灯競争、スプーン競争とあり、「待ち焦れたる此大劇」は一哩<sup>マイル</sup>（約1600m）

競争である。乗杉は提灯で三等になり、一哩にも出場した。「矯漢<sup>きょうかん</sup> [強い男の意] 登場するもの此に半百!!!」「円環<sup>えんわ</sup>を駆遶る」「雲集せる数万の観衆は唯仰天頰に競技を促す」「信砲一発白煙迷ふや、雑然紛然団雲の如く彼らは勇猛猪進したり」「双眼血を走らせ、口角火焰を吐きつ、「負けず劣らず駆けに駆けて一步半歩の差を以て足先勝線<sup>けんせん</sup>を踏めば喝采破れて乾坤此に振ふ、噫<sup>あゝ</sup>盛哉健児<sup>あきかなるかなけんじ</sup>」。大歓声のグラウンドに強者50人ほどが競り合い、乗杉は四等入賞した<sup>55</sup>。

#### 3-4-4. 雪中行軍

「風雪を衝ひて東崎に向ひ、海浜を沿ふて大野に出て金石街道<sup>かないわ</sup>を経て帰れり」<sup>56</sup>とは、明治33年（1900）2月3日の予科と医学部2年生の雪中行軍の記録である。四高から日本海に出て海沿いに進み市中に戻る20kmほどか。同月8日には1年生が伝燈寺を経て牧村（能美郡）から臥龍山脈を横切り「阪路嶮悪積雪膝を没」し帰校。心身鍛錬も報国には必要であろう。

#### 3-4-5. 禁酒令

2年生も終わりに近付いた明治33年8月、北條校長は禁酒令を出した。その内容は翌年度の『第四高等学校一覧 自明治三十三年 至明治三十四年』附録の「生徒禁酒ニ付保証人へノ通牒」に記載される。本校に来て学ぶ者は皆必ず志す所があるにもかかわらず、往々にして校規に触れ学業を放棄する者が出るのは嘆かわしく、十人中七八人が酒に起因する。酒に遣悶放懷（憂さ晴らしと気分解放）の効用があり、俗礼交際（世間の付き合い）に必要なといえ、学生には不要ゆえ保証人にもご協力頂きたいという趣旨である<sup>57</sup>。『北辰会雑誌』の「禁酒の励行」にも「学生が志薄く、胆小なるに係らず、楼上一酔を貰うて大言壮語し、三杯の酒を傾け尽して天下に英雄眼中に在りと絶叫し、或は時に醉眠美人の膝に放吟し白馬銀鞍の句に揚洲狭斜の街を夢み、終に志気銷沈、品性あるなく、見識あるなく、滔々たる社会濁流の内に渦き去るゝもの皆酒に因て来るものにあらざるなき乎」<sup>58</sup>など目に余る飲酒の実態が報告されている。有志による青年節酒会程度では不十分だったようである。

#### 3-4-6. 西田幾多郎の講話

学友会誌『北辰会雑誌』に西田幾多郎の講話が収録されている<sup>59</sup>。演題は哲学と日常生活との関係についてである。天に星辰あり、地に山川あり、これらを支配する原則は如何なるものか、自己と宇宙は如何なる関係か、自己が宇宙の一部か、宇宙が自己の一部か、別に全てを統監するものがあるか否かを研究するものが哲学である。これらに一定の見解を持ち確立不拔を有すれば、信仰は実行に現れ、大いに日常生活に影響するものであると。西田の『善の研究』は四高時代の講義から生まれたとされる。浄土真宗の教えと実践に育った乗杉は、仏教と生活と学問と真理を大観する西田哲学に大いに啓発されたことであろう。

### 3-5. 3年生：同期入学は36名から15名に

#### 3-5-1. 特待生

明治33年9月現在の「第一部第三年文科」は21人で、乗杉と同期入学は15人、元上級生は6名となった。1番の西川巖と2番の乗杉に特待生の「○」印がある。特待生は学術優等品行方正な予科生徒全体から12人以内が学年末成績によって選定され、授業料免除となる制度で<sup>60</sup>、校友会誌には「窓雪螢光よく切磋の功を積まれし結果、撰に預りて本学年の特待生となられし諸氏」<sup>61</sup>の文科、工科、法科、医科の2年生と3年生11名が記されている。

#### 3-5-2. 越中地方行軍の旗手

4月27日から2泊の「越中地方行軍記事」<sup>62</sup>では、乗杉は、北條校長を総監とする総員500名の一大隊の生徒幹部のナンバー2で、大隊附大隊副官に次ぐ大隊旗手を務めた。

#### 3-5-3. 恩師たち

成績表の科目の所々に担当教員名が記されている。国語：藤井乙男、漢文：村上珍休、作文：藤井乙男、英語講読：田部隆次、英語文法作文：ハビランド、英語講読(英)：長屋順耳、独語講読(甲)：仲俣匡、独語講読(乙)：中目覺。田部は東京帝国大学でラフカディオハーンに学び、ハーン研究と翻訳を行った。当時26歳の長屋は視学官、督学官、東京外国語学校長、学習院院長をつとめた。3年生の学年成績も西川、乗杉の順であった。

#### 3-5-4. 卒業

明治34年(1901)7月10日、乗杉等の文科20名は「第四高等学校大学予科第七回卒業生」となった。入学時の36名は篩<sup>ふるい</sup>にかけられ、心身鍛練し、節制し、経済的にも大禍無かった15名が卒業に至った。20名全員が東京帝国大学文科大学に進んだ。法学、工学、医学、理工科では京都帝国大学に進んだ者もいるが、全体では東京帝国大学に進学する者が圧倒的に多かった。総代は尋常中学校の1年先輩の西川巖、次点が乗杉で、ともに「文科志望」とある。文科志望20名の内訳は史8、哲7(乗杉)、英文3(西川)、国文1、国史1であった。

### おわりに

乗杉嘉壽が金沢で過ごした石川県尋常中学校および第四高等学校時代の資料調査により以下のことが明らかになった。彼は軍都金沢にあって世界の中の大日本帝国を認識し、自己の内に壮大な宇宙観と倫理観を育てたこと。乗杉は中学校の校友会設立のため、学友の前で考えを述べ、組織を提言し実現に導いたこと。卒業生総代となり、卒業後「人類としての吾人の価値」と題する演説を行ったこと。第四高等学校でも文武両道ずば抜け、雪中行軍を踏破



し、春季行軍では大隊付き旗手を務め、陸上運動会では一哩競争で入賞し、「人生の墮落」を演説したこと。金沢で当代一流の教師陣に学び、学生生活を謳歌し、心身を鍛えて自信をつけたこと。学生生活と時代背景が彼の人生の基礎を作ったと考えられる。

宗教心も正義感も強かった乗杉青年は、人は如何に生きるべきか、社会悪の浄化のために何をすべきかと、孤独の深淵に葛藤してもいた。眞壽寺の日常の中で社会教育は学校教育を包摂するという教育イメージを培った乗杉は、軍都金沢で学業の先に国恩に報いる責務を自覚する。音楽学校長時代には、同校の社会認識を高める策を多彩に講じ、演奏や教育によって音楽学校と社会、学校現場と音楽学校を結んだ。乗杉が音楽報国に精励し、学校の社会化に努めたことは、とかく戦意昂揚や国策対応とのみ見られがちである。だが忘れてならないことは、第一に、高等教育まで受けた一握りの者として乗杉は報国の責務を強く認識し、東京音楽学校の専門教育もその線上に捉えていたこと、第二に、学校教育が学校の枠にとどまらず国民に広く裨益するようにとの乗杉社会教育論の形成には彼の青少年期と深い関わりがあることを理解することであろう。

眞壽寺に関する継続調査と東京帝国大学時代の資料の渉猟は今後の課題としたい。

**謝辞：**乗杉秀照氏・瑛子氏夫妻、富山県砺波市立出町小学校長小桜豊人氏と教頭牧野和則氏、埜村勲氏、石川県立金沢泉丘高等学校内一泉同窓会事務局長中山一郎氏、金沢大学資料館高出真妃氏、金沢大学中央図書館松原美重子氏、金沢大学医薬保健系事務部総務課山本修氏、富山県立魚津高等学校、乗杉澄夫氏、乗杉洋一氏のご協力に特に御礼申し上げます。

## 注

- 1 乗杉は大正10年に雑誌『社会と教化』を発刊・主宰し、自身も膨大な論文を執筆した。
- 2 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会（2004）78頁。
- 3 同上、258頁。
- 4 日本近代社会教育史における乗杉に関して、以下のような研究がある。①小川利夫・新海英行『近代日本社会教育論の探究—基本文献資料と視点』大空社（1994）。②伊藤めぐみ「乗杉嘉壽の婦人教育論：その意義と限界」『日本現代社会教育史論』日本図書センター（1995）71-88頁。③名古屋大学共同研究「戦間期日本社会教育史の研究—乗杉嘉壽の社会教育論を中心に」『名古屋大学教育学部紀要』第43巻第2号（1997）289-330頁。④松田武雄「教育改造と社会教育の思想—乗杉嘉壽の社会教育論」『社会教育思想研究』（九州大学社会教育研究室）第1号（2001）1-40頁。⑤佐藤智子・荻野亮吾・中村由香「近代社会教育政策の成立過程に関する研究」『生涯学習基盤経営研究』第34号（2009）71-86頁。
- 5 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』音楽之友社、平成15年3月。乗杉については同1126-1164頁。著述リストには乗杉恂氏のご協力があった。
- 6 上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか』新曜社（2010）。同氏の口頭発表に「音楽

- 教育の社会化に邁進した社会教育官僚一大衆社会と向き合った乗杉嘉壽校長」がある（洋楽文化史研究会2009年12月13日）。
- 7 「乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校—その建学の精神の具現化と社会教育論の実践(1)-(4)」『東京藝術大学音楽学部紀要』（第32集、平成19年、109-140頁；第34集、平成21年、105-121頁；第36集、平成23年、179-194頁；第38集、平成25年、87-104頁）。
  - 8 安カ川恵子「先人展“真宗の説教者たち”を開催して」『砺波散村地域研究所 研究紀要第28号』平成23年3月、48頁。
  - 9 パンフレット「真寿寺本堂落慶記念法要」（昭和54年4月20日、21日）による。
  - 10 砺波のアーカイブを作る会ブログ「小学校教育の歴史～出町小学校の歴史から～」  
[http://tonamino.jp/shiru/post\\_38.html](http://tonamino.jp/shiru/post_38.html)（2014年11月1日）による。
  - 11 乗杉は富山県立魚津実業学校校歌も作詞した。「立山の空に聳ゆる雄々しきにならえとの仰せかしこみひたすらに心も身をも鍛えなむわれらは魚津の健児」「海山の眺めうましく幸多き里魚津国の内外にその名をば誉れも高く揚げなむわれらは魚津の健児」（『魚津高校百年史』（平成11年）および記念CD「創立百周年記念 校歌・応援歌集」による）。
  - 12 本項以下の内容は真宗大谷派西福寺（金沢市本町1丁目）の備え付け資料「西福寺物語外伝—金沢一中・泉丘高校と西福寺」による。
  - 13 「発祥の地」の記念碑は平成25年6月15日、一泉同窓会（金沢一中・金沢泉丘高等学校同窓会）により一泉創立120周年記念事業の一環として建立され、記念式典が行われた。校舎跡地は正確には金沢市本町1丁目の西福寺西隣駐車場である。校史資料と校地の移転等について中山一郎同窓会事務局長に種々ご教示頂いた。
  - 14 同校は明治31年9月石川県第一尋常中学校と改称、32年に新たに3中学校が開校したため、石川県立第一中学校と改称、32年4月石川県立第一中学校、40年3月石川県立金沢第一中学校となる（金沢一中・泉丘高校百年史編集委員会『金沢一中・泉丘高校百年史 前編』一泉創立百周年記念事業実行委員会、平成5年、42頁）。
  - 15 「卒業」印の他の2名は金沢市の「第五年級」と「第一年級」である。
  - 16 『金沢一中・泉丘高校百年史 前編』32頁。
  - 17 同上、33頁。
  - 18 同上、同頁。
  - 19 同上、34頁。
  - 20 坂本麻美子「石川県人の西洋音楽事始」（お茶の水音楽研究会『徳丸吉彦先生古希記念論文集』平成18年、341-352頁）では明治時代の石川県師範学校の音楽教員として明治17年以降の5名を挙げている（349頁）。
  - 21 『一泉』（石川県立金沢泉丘高等学校内一泉同窓会）5号、昭和57年4月、1頁。
  - 22 『一泉』7号、昭和58年4月、1頁。
  - 23 明治19年に帝国大学令が公布され、帝国大学の文科大学に法科、医科、工科、文科、理科の五大学があった。東京大学法学部の前身。
  - 24 同上、同頁。
  - 25 石川県尋常中学校校友会『校友会雑誌』第1号、明治31年9月、1頁。
  - 26 乗杉の先輩3名中の一人に西川巖がいた。乗杉は四高2年生で、留年した西川と同級となる。西川は石川県出身で帝大に進み英文学を専攻したが、卒業後早世した。
  - 27 『校友会雑誌』第1号 明治31年9月19日、8頁。

- 28 同上、同頁。
- 29 同上、9頁。
- 30 同上、78頁。野田校長の演題は「世界に於ける日本帝国の位置」であった。
- 31 同上、70-71頁。
- 32 同上、72-73頁。
- 33 同上、73-74頁。
- 34 同上、74頁。
- 35 石川県尋常中学校校友会『校友会雑誌』第2号、明治32年1月11日、12-15頁。
- 36 『校友会雑誌』第4号、明治32年9月、108頁。
- 37 『校友会雑誌』第8号、明治34年12月、117頁。
- 38 東京音楽学校校舎はこの二人の設計で明治23年に竣工した。
- 39 『石川四高記念館』（平成20年4月）パンフレット解説。
- 40 『第四高等学校一覧 自明治三十一年 至明治三十二年』101頁。乗杉の名は36人中26番目にある。
- 41 日本学生サッカー史はデ・ハビランドの東京高等師範学校におけるサッカー指導（明治37〔1904〕年）に始まるとの通説に対し、大久保はデ・ハビランド前任の第四高等学校におけるフットボール部創設（明治32〔1899〕年）を前史と位置付ける（大久保英哲<sup>ひであき</sup>「日本学生サッカー前史・四高外国人教師デハビランドとヴォールファルトのフットボール」『体育学研究』第58号（2013）、337頁）。
- 42 『第四高等学校一覧 自明治三十一年 至明治三十二年』56頁。
- 43 同上、37頁。
- 44 同上、66頁。
- 45 乗杉が寄宿舎ではなく下宿していたことは乗杉秀照・瑛子夫妻の伝。住所等は不明である。
- 46 『北辰会雑誌』第20号、明治31年9月、63-71頁。
- 47 『北辰会雑誌』第23号、明治32年5月、99-101頁。
- 48 同司令部は日露戦争で大活躍し犠牲者も出した。乗杉の東京帝大卒業の年、中学校を一緒に卒業した6名も犠牲となった。5名は明治37年3月から10月に旅順盤龍山、沙河会戦、奉天会戦で、1名は12月鳳皇城病院で死した（『金沢一中桜章健児 国事殉難者芳名録』平成5年）。
- 49 『自明治三十一年九月至明治三十二年七月 大学予科学年評点』（金沢大学資料館）による。
- 50 西川巖については注26参照。
- 51 西田は明治28年4月～29年4月石川県尋常中学校の教諭であった。乗杉の在学中である。
- 52 『北辰会雑誌』第26号、明治33年3月、1-3頁。
- 53 『北辰会雑誌』第25号、明治32年12月、104-108頁。
- 54 『北辰会雑誌』には西田の寄稿「美の説明」「スピノーザ」「カント倫理学主義」もある。
- 55 『北辰会雑誌』第26号、明治33年3月、124-150頁。
- 56 同上、124頁。
- 57 『第四高等学校一覧 至明治三十三年 至明治三十四年』178頁。
- 58 『北辰会雑誌』第28号、明治33年11月、41頁。
- 59 『北辰会雑誌』第25号、明治32年12月、94-95頁。
- 60 同上、63頁。
- 61 『北辰会雑誌』第28号、明治33年11月、114頁。
- 62 同上、127-144頁。

# **Formation of Kaju Norisugi's View of Social Education in His Adolescence: Study of His Junior High School and High School Days in Ishikawa Prefecture**

HASHIMOTO Kumiko

Kaju Norisugi\* (1878-1947), who served as the principal of Tokyo Academy of Music (Tôkyô Ongaku Gakkô) from 1928 to 1945, is regarded as an important person in the educational history of Japan's modern society. By investigating mainly his junior high school and high school days in Kanazawa city in Ishikawa prefecture and by revealing his student life, school traditions and the period backdrop, this paper considers the effect which his adolescent years had upon the formation of his educational philosophy and aims at contributing to reveal his school management focusing on social education.

The paper consists of following articles.

## **I . The origin of Norisugi's philosophy of social education: his infancy and elementary school days in Toyama prefecture**

Norisugi's birthplace is Shinjuji, a temple of Jodo Shinshu Buddhism in Toyama prefecture. The temple, which was constructed as a permanent sermon space in the early Edo period, served as the center of culture and learning for people of the local community. It appears that the origin of Norisugi's ideas about social education lies in Shinjuji.

## **II . Norisugi's leadership and boosting national pride: his junior high school days in Ishikawa prefecture**

This article traces from Norisugi's first year of junior high school in Kanazawa to his graduation. At the time, Kanazawa was a military based city which had the 9<sup>th</sup> Division, one of the infantry divisions of the imperial Japanese Army. The environment is thought to have had no small impact on Norisugi's future vision. When he was in junior high school, he got other students together to establish the student council, which reminds us his work performance in his later years. He made the veledictory speech titled *Our Worth as Human Beings*.

## **III . Excellence in both academics and sports, his self-governance: his Daishi High School**

days

Norisugi learned at Daishi (the fourth) High School. In liberal arts department of the school, he studied with excellent teachers. He was good at both studies and sports and enjoyed a fulfilling student life. As he was a student with a belief in religion and a strong sense of justice, he asked himself what he should do to reform social ills. In a speech meeting, he gave a speech titled *The Degradation of Life*, in which he admitted his own powerlessness and talked about his cosmic view.

Norisugi's way of thinking about education is as follows: (1) Education should be for the entire nation. (2) Schooling is an important part of education. (3) School education should be open to the community and society. Norisugi's unique theory of social education consists of these points, whose origin lies in his life in Shinjuji. Moreover, through his school days in Kanazawa, he began to consider the role played by education, education opened to the nation, and school education opened to the society. It is assumed that his will to support the nation, which was also brought up in Kanazawa, was carried out in his duty as the principal of Tokyo Academy of Music in his later years.

\* In Tokyo Academy of Music, there are some documents in which Norisugi's first name was written as Kazu. His family calls him Kaju.